九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

読本作家の構成能力の問題 ： 桜姫全伝曙草紙をよすがとして山東京伝の場合

目加田，さくを
福岡女子大学助教授

https://doi.org/10.15017/12373

出版情報：語文研究. 4/5, pp.72-78, 1956-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

読本作家の構成能力の問題

――桜姫全伝曙草紙をよすがとして山東京伝の場合――

目加田さくを

寛延二年1749　大阪の地に古今奇談英草紙が発刊されて以来、陸続と後を逐うた怪談登志男1750　諸州奇事談1750　古今茅屋夜話1755　本朝水滸伝1755―1790　諸国怪談帳1757　当世操車1760　古今奇談繁夜話1766　西山物語1768　席上観古今奇談翁草1778　垣根草1770　雨月物語1763　1776　日本水滸伝1777　古今奇談怪異夜話、怪異談叢1781　小説唐錦1778　坂東水滸伝1778　古今奇談深山草1782　女水滸伝1783　古今綺談続編奇談莠句冊1786　等々の初期読本は、水滸伝物を除く殆んどが拍案驚奇や警世通言、醒生恒言、喩世明言、今古奇観、剪燈新話、剪燈余話等に出典を仰いだ所謂支那種の怪談集乃至奇異談集に類するものである。従ってそれらは個々の短篇の怪異談よりなる短篇集であって、未だ読本らしい面目をもった長篇、中篇の出現は未だしかったのである。とは、当時期における水滸伝物は又、あまりにも幼稚な飜案物の域にとゞまるものであって、後世、その系流の頂点として馬琴の南総里見八犬伝を結実し得たという文学史的意義を有するに過ぎない作品群であったからである。

更に江戸期に入っても、通俗大聖伝1789　巷説考菟道園、拍掌奇談風雙紙1793　いろは酔故伝1794　高尾千字文1796　月下清談1798　忠臣水滸伝1799　燈下戯墨玉の枝1802　月氷奇縁1803　憂曇華物語1804　石言遺響1804　復讐奇談稚枝鳩1804　等の如き作品が出現するに及んで愈々、中篇、長篇の出現の機が熟して来た事を想わせるのである。果して翌文化二年1805十二月、通俗大聖伝以来、読本にも才筆を伸そうとして習作を重ねていた山東京伝の手により桜姫全伝曙草紙が発兌されるに到った。本草紙は五巻二十回よりなる中篇で、首尾一貫した如何にも読本らしい体裁を備えた作品として世に出たわけである。

さて、京伝の桜姫全伝曙草紙が出現する以前において、所謂、桜姫物として、どの様な作品が世上に流布していた

であろうか。本草紙の例言において「此書何人の作なることを詳にせず友人拝田泥牛子市に購ひ得たる所なり会木偶に舞はしめ歌舞伎に作りて普く児女の耳目にふれたる美女桜姫一期盛衰の事を記し正史実録は更なり野史稗説といへどもいまだ載せざる奇談なり云々」と言っている。「此書云々市に購ひ得たる所なり」はもとより虚構の言であるが、美女桜姫を題材にした「桜姫もの」が、既に人形浄瑠璃や歌舞伎に屢々上演されていた事は事実である。今日、歌舞伎、人形浄瑠璃上演史上、桜姫清玄物で最も古くは、土佐少掾橘正勝による「一心二河白道」の延宝二年1674三月興行ではあるまいかといわれている。次いで仝五年1667頃、江戸市村座に「清玄七年の亡魂」、天和三年1633三月江戸森田座「女若二河白道」の上演が記録されている。その後元禄十一年1693春、京都万太夫座興行の近松門左衛門作「一心二河白道」は著名である。更に津打治兵衛の「一心二河白道」があり、以上の諸作品が中心となって、「桜姫物」における代表的ゆき方(A)として、恐らく最も古いタイプとして、「一心二河白道」系流を形づくっていると想われる。その構成を最も著名であるところの近松の「一心二河白道」をとって考えてみるならば、次の通りである。

○主人公　桜姫
○その父　丹波国佐伯郡司秋高
○家　老　さゝめ太夫
○その妻　おたけ
○その子　小ふじ　清松
○妹　花鳥の前
○めのと　さえだ
○腰　元
○恋　人　三木丞よしなが
○下　人　弥太郎
○化生女
△恋　敵　式部卿清玄
×恋　敵　清水寺住持園部兵衛正連
×家　老　桑田藤太
×その弟　軍　平
×　芥川源五
　山崎渝重
　源五妻、妹、腰元その他（○印味方×印仇役）

第一幕に清水寺の場がある。姫に横恋慕の許婚者園部兵衛が登場し、事件の説明役を果す。次に姫が登場、清水の舞台に登る。そこへ三木丞よしながという伊達若衆が登場し、それを姫が見初め、如何にも初期の歌舞伎らしい褒詞のやりとりがある。姫の方から積極的に働らきかけ、計をもって誓約書に署名させる。こゝでは三木丞は、あまり姫

に好意をもたず、下人の知恵をかりて無理ぜめの署名に、「べかこのちやのみや」とする。そのあと清玄みそめとなり、煩悶となる。桜姫をかばう清玄が園部にたゝきふせられるが、計によって園部の鉄砲をとり、姫に去状をかゝせる――姫にからむ恋敵除去の助けをする――さゝめ太夫の献言により姫は三木丞と祝言となる。清玄は姫の恋人がわが念者三木丞としり姫をあきらめ二人の為に尽力する。仇役園部が切りこみ姫を逃がす。これで上巻は終り、あと中、下二巻では、忠義の家老さゝめ太夫一家の苦労（中巻）と、閻魔大王の前にに引き出された姫が再び娑婆へ帰される――清水寺で桜姫頓死、蘇生と照応する――、火の川、水の川があらわれる巻で、園部兵衛が討たれる（下巻）という後世の桜姫物とは大分違ったゆき方である。ただ、姫とその恋人、横恋慕する清玄、もっと強度の敵役的性格の恋仇、忠臣とその家族、逆臣とその一族、という人物はすでにそろっている。この系流の最大特色は所謂女若二河道で、清玄が姫の恋人と念者関係をもつという事。この変型が桜姫東文章の白菊丸と自休――（桜姫が白菊丸であるが）――となってくるのである。さらに又こゝでは、清玄が念者に恋を譲り恬淡である事は面白い清玄物といえる。更に。桜姫のよみがえりの原型が出ている事である。

さて(B)は、宝暦十二年1762三月京都蛭子屋座所演の操浄瑠璃　清水清玄花係図都鑑、それを歌舞伎にして仝年七月大阪三桝大五郎座で初代歌右衛門が始めて清玄を演じ、明和六年1796三月江戸中村座で再度演じたといわれる「清水清玄六道巡り」系のもの、即ち、黙阿弥の「傾城入相桜」につながる系列、「音羽山恋慕飛泉1763　菊地大友姻袖鑑1765　桜姫操大全1776　等々がこれに属する。これらにおいては、桜姫の恋人が清水宿直之助清玄で、同字の清玄法師が犠牲になるところに清玄執念の契機を置くものである。

(C)においては、所謂隅田川、松若、梅若、信夫惣太にからまってくる一系列の桜姫物である。御摂垂曽我1779　都鳥弥生渡　松春寿曽我1803（後の隅田川花御所染1814　桜姫東文章）等である。

(D)は、寛政三年1791七月所演の「女達高麗屋経緯」、（後の閨扇墨染桜1810　隅田川花御所染1814）等であって、女清玄が出現するのである。

(E)は二人亡霊乃至法界坊にかゝわりをもつものであって宝暦七年1757常磐津「二人浅間」において曽我十郎祐成に対して出た「八橋」の姿が二人あり、一人の亡霊は桜姫に怨を吐く清玄である。これは独立した一系流を形成しているわけではないが、二人桜姫の着想の典拠と考えられ、後世、隅田川続俤等において、清玄と法界坊、桜姫と野分姫という風に、隅田川の世界に桜姫物が転移させられ

た場合混線をきたすのは、常磐津、所作事に「二人浅間」「双面」、「葱売」が流行していたゝめであろうと想われるのである。

以上、桜姫清玄物は、操浄瑠璃、歌舞伎、所作事、常磐津において、流行するにつれ、或は隅田川とからませて姫の恋人を松若に、恋敵役に信夫惣太とくみ替えたり、或は女清玄まで出現させて異色を出すという風に、種々の趣向が試みられるに到っていたわけであるが、それらをうけて京伝はどの様な桜姫物を読本として形成しようとしたであろうか。その様相に彼の構成力の資質をみようと思うのである。

京伝は、桜姫にまとう執念の清玄を純粋にとりあげ、それを深刻化して緊密な構成を試みようとした。彼は、桜姫物において、未だ出現しなかった姫の母（野分の方）を設定し、重要な役割を与えた。又これも新しく愛妾玉琴を登場させ、母の嫉妬による惨殺という悪因により姫が清玄につきまとわれ、母が変死する悪果を招来するという因果律を根本にたてたのである。敢て破戒僧となった清玄の慕情にも不拘、遂げられざる恋の妄執は、異母兄妹という因縁によってぬきさしならぬ鞏固な位相を決めたのである。

曙草紙五巻二十回の構成をみると

第一回

○事林広記を引用し、悪因悪果の理すみやかに到った実例として桜姫物語を提示するという序言

○物語の「時」（人皇八十二代後鳥羽院の御宇）、「所」（丹波国桑田郡）、「人」（鷲尾十郎左衛門義治）の三設定

○真野水二郎の生い立より改心して弥陀二郎となり諸国行脚に出る迄。第一回は近くは第三回胎児（清玄）救済の伏線であるが、全体からみる時は第十九回の終末（第二十回はつけたし、後日譚とみるべき物）

阿闍梨これを聞きて殊勝に思はれ云々、宗雄弥陀二郎道心を具して館を出でんとす。田島、篠村これをとゞむるに詞なく涙とともに送りけり

に照応するもので、曙草紙一篇の外枠をなしている。この枠内で生起した悪因縁は悪果報によって払い浄められた——（野分雷死）——あと宗雄は鷲尾家の家督を義治の甥に継がせ、舅姑妻義兄母子の追善に雲水の旅に出るという風に恩讐の巷を一歩出離させて巻を了るのである。即ち、全体の大序であり、三回以下の伏線をもかねた、事件の説明にあたるのが一回である。

第二回　上昇動作

義治が玉琴を溺愛し野分の嫉妬を招く、奸計の契機として尾長の蝦蟇が巧にとり入れられている。盗賊蝦蟇丸は既に清水清玄（B系）に出ている。

第三回　頂点
野分の方玉琴を惨殺する
第四回　下降動作
玉琴の魂魄胎児に還着し、弥陀二郎に救われる。
第五回　終末動作
轎裏遺書を遺して公連自害
以上五回迄で、玉琴惨殺事件、が生起し終末する。この一事件の頂点は、惨忍な玉琴殺しの場である。歌舞伎にそのまゝのる場面である。殺しを頂点とする玉琴事件は、全体の所謂悪因をなすものであって、曙草紙一篇から見れば、一回二回は事件の説明、（a）三回以下は上昇動作（a）である。五回の公連自害は悪因玉琴惨殺事件の終末動作であると共に、忠臣篠村公光登場の場、その意味で事件の説明でもある。
第六回　事件の説明（a）（A）（B）（C）
桜姫の誕生
第七回　上昇動作（三種）（A）（B）（C）
清玄桜姫を脅恋する（A）。信太平太夫の家人姫を奪はんとする（B）。桜姫播州宍粟の郡士伴希雄の息三木之助宗雄と相識る（C）。「二河白道」系恋人三木丞の名の系統を継ぐ三木之助である。これは「二河白道」第一場の場面以来、必須の一幕である。
但し清玄は京伝においては恋敵役信太平太夫系の家来と争わせず、姫の忠臣がこれと争う事にした。
第八回　上昇動作（A）
清玄の落魄。
第九回　上昇動作（a）
弥陀二郎と常照阿闍梨との邂逅――十九回の伏線。
弥陀二郎と篠村公光との邂逅。
第十回　上昇動作（C）
桜姫宗雄を慕い病臥、桜姫宗雄と通ずる。
第十一回　上昇動作（B）　事件説明（D）（E）
義治、信太平太夫勝岡蝦蟇丸に亡ぼされる。（B）野分、桜姫逃亡（D）（E）。
第十二回　上昇動作（D）（E）
野分蝦蟇丸に誘われる。（D）は野分蝦蟇丸譚。
第十三回　頂点（E）　上昇動作（D）
野分蝦蟇丸の妻子を虐げる。小萩殺される。
第十四回　終末（E）
二人比丘尼発心話（E）は挿話として終末する。
第十五回　上昇動作（A）（C）
桜姫宗雄を恋い前途を悲観して仮屋に死亡。
第十六回　頂点（A）
桜姫清玄の庵室にて甦生、清玄の執着に悩まされ、清玄弥

陀二郎に斬殺され、清玄の妄念二人を引き戻す。

第十七回　（頂点）（B）（D）

鷲尾の家臣信太平太夫を亡ぼす。野分蝦蟇丸を夫の仇とし り殺害されんとして田鳥造酒丞に救援され蝦蟇丸を討ちとる。

第十八回　終末（B）　上昇動作（C）　頂点（C）

鷲尾復興する（B）。桜姫成婚、桜姫妖気に悩まされる。

第十九回　頂点（a）　終末（a）

桜姫二人。野分の惨虐暴露。玉琴の怨念成仏。桜姫骸骨となる。野分雷死。宗雄出家。義治の甥相続と決定。

第二十回　終末（a）　（C）（E）（A）

鷲尾義基繁昌

悪因払拭――宗雄出家。桜姫親子兄弟五人成仏。楊貴妃桜による証明。松虫鈴虫の回向。

以上の如く、玉琴虐殺事件が悪因となって、清玄桜姫の事件（A）が展開するのであるが、それと相まって、鷲尾家滅亡、再興の事件（B）、桜姫宗雄の恋愛、結婚、死別の事件（C）、野分と蝦蟇丸の事件（D）、二人比丘尼（松虫鈴虫）の話（E）、が生起消長してゆくのであって、これらがないまぜられて筋を複雑緊密にし中篇としてよくまとまったわけである。しかしたゞ桜姫と宗雄の恋愛、結婚の事件（C）と清玄の執念（A）とが直接関係しないところに、即ち、後世歌舞伎脚本では効果をあげているのであるが、清玄が桜姫の宗雄を慕う姿に一層嫉妬の炎をかきたて得なかった、「妾には夫あり云々」の姫の言に対して清玄が反応を示さなかったところに、京伝としては、大きなぬかりがあったのである。然し、前述近松の歌舞伎脚本に比すれば一世紀のへだゝりは十分に感じとれる進歩である。本草紙の敵役の特殊性について一言すれば、類型的な悪役は、信太平大夫一人である。即ち、本草紙においては主人公姫、その父、その母、三人三様の敵役をもっている。父の敵役は、その父祖に討伐された海賊の子蝦蟇丸である。即ち、恨を買う因縁が当方にある敵である。母野分の敵役は玉琴であるが、当時封建社会において子種のない本妻には当然蓄妾を認めねばならぬ暗黙の不文律があったのであって、蓄妾の責任は本妻にありとされた、即ち野分自身の不妊によって妾として贖われた玉琴の懐胎に恨を有つ事自体が否定されるべき立場にあり乍ら、これを惨殺して怨霊としたのであるから、本草紙唯一の純然たる悪役、即ち、桜姫悲劇の基となる仇役はめぐりめぐって実は母野分である、という設定のし方である。姫のもつ敵役清玄は、生母の罪悪の報として立ちあらわれたものであり、平太夫一人がありふれた憎まれ役である。敵は己が心にという近代戯曲のゆき方に京伝は甚だ迫っているわけである。

上述みて来た曙草紙二十回の中、挿話にとみ、それが随所に頂点、即ち　みせ場をもつという事は、人形浄瑠璃、歌舞伎と相影響しあっていた京伝、馬琴ら読本作家の立場として、歌舞伎の場面が脳裏に動いての場面構成の結果であると想われる。只、京伝が馬琴と異るのは、京伝は忠実な孔子一代記である大聖伝執筆以来、本朝水滸伝に触発されて、氷滸伝の世界に仮名手本忠臣蔵をあてはめて忠臣水滸伝を試作したり、酔菩提の世界に稲妻表紙の後篇を続行させようとして一休咄、山姥、法華経を材料に仰いで綴りあわせて本朝酔菩提をなしたのであるが、高尾千文文を試作した馬琴を以てしても分る通り、当時の読本作家の能力をもってしては、創意をもるに到らなかった。京伝は洒落本において通気粋語伝、黄表紙において梁山一奇談、天剛楊柳をも試作し、水滸伝に挑んだわけであるが、大篇水滸の構成力を会得するに到らなかった。馬琴が、到頭、水滸編訳をも刊行した程、捲土重来水滸に食い下り、南総里見八犬伝を構成するにおいて、その程度に摂取し得た水滸伝の構成力は、京伝には無縁であり、異質であった様に想われるのである。京伝は仮名草紙、前期読本の域において支那小説の構成手法を摂取したと思われる。本草紙の引用書目として掲げた事林広記、説文、離魂記は実はさしたる関係はなく、「唐の代の名妓翠翹が云々」とさりげなくいう金翹伝、李笠翁の風箏誤伝奇、後漢書、十八史略等から得た妒婦の話柄等を、山州名跡志や二人比丘尼、平家物語、二人浅間、石言遺響、松虫鈴虫伝説等々から抽出して来ると同じ様に部分的趣向として摂取しているに過ぎない。短篇、中篇型の作家、仮名草子的構成力を資質として、所謂小説三言、今古奇観といったあたりに、又日夜親しむ歌舞伎、掾浄瑠璃の場面構成に緊密な構成力を啓蒙されるところのあった作家、というべきではあるまいかと想う次第である。